



課★金★制★彼★女★

基本おこしおのりは無茶した

小説 上田ながの  
挿絵 高瀬むう

**立ち読み版**

序章	あたしがあんと付き合う？ あり得ないでしょ	006
第一章	リアルガールフレンドは幼馴染み!?	027
第二章	キスはレアアイテム!?	048
第三章	彼氏と彼女？	080
第四章	初めての……	113
第五章	ガチャブン回し	141
第六章	エッチな日常	164
第七章	嫌いじゃないわ	209
終章	ドロドロになるまで	231

## 登場人物紹介

Characters



おりがみ まつり  
**折紙 末莉**

ごく普通の家庭に生まれた少女。父を早くに亡くしており、母と二人暮らし。努力家で、いくつもアルバイトを掛け持ちしている。裕真とは幼馴染み。

おくの いん ゆうま  
**奥乃院 裕真**

名家である奥乃院家の御曹司。性格は基本的に内気で、自分に自信が持てない。趣味はソシャゲー。

むかいしま ことり  
**向島 小鳥**

末莉の親友。コンピュータに詳しく、アプリの制作などもしている。かなりの悪戯っ子気質の持ち主。



「ってか、あんた、き……キスだけであそこを硬くしすぎなのよ。ずっとあたしの太股に当たってたわよ」

「それはその……申し訳ないけどどうしようもないっていうか……」

確かにペニスは勃起してしまっている。痛々しい程に。正直キスだけじゃ物足りなかった。セックスしたいと思ってしまう。

「その……確かまだ今日のカチャ……三回くらい残ってたよね？」

「え？ まだ回すつもりなの？ ホントエッチなことしか考えてないのね。この変態」  
言い返しようありません。

「駄目……かな？」

「……別に関わらないわよ。どうせあんたが求めてるのなんて出ないから……」

顔を真っ赤に染めつつも、スマホを差し出してくる。これを受け取りガチャを回した結果——下校途中、裕真は末莉と共にホテルに入る事になった。

「はあ……またあんたとここに來ることになるなんて……」

「い、嫌だった？」

「別に……い、嫌じゃないわよ。仕事なんだから！」

「そう……仕事だもんね……。あはは……」

言いさられるとやはり寂しい。ただ、寂しくはあるけれど、こうして末莉と二人でホテルに入れることは嬉しかった。

「えっと……キスしていい？ え……エッチの一環として」

「……エッチの一環……なら、別にいいわよ」

末莉が頷いてくれたので彼女を抱き締めると、教室でそうしたようにキスをした。今度は最初から舌を挿し込むキスである。グチュグチュと淫靡な音色を奏でながら、幼馴染みの口腔を食った。

「んっふ……はふっ……。んっちゅ……むちゅう……」

こちらの動きに合わせて、末莉も舌を動かしてくる。ただ舌と舌を絡めるだけでは終わらない。口腔粘膜を混ぜあわせながら、互いに唾液を交換した。コクコクと喉を動かし、裕真の流し込んだ汁を末莉が飲み干してくれる。

（飲んでる。僕のを末莉が飲んでくれてる……）

堪らない光景だった。より興奮が高まっていく。

「ま……まちゅり……んんん」

「あっふ……むっじゅ……。あちゅっ……はじゅあああ……んっんっんんん」

自然舌の動きが激しさを増していった。これに比例する様にただでさえ硬くなっていた肉棒がより熱くたぎっていく。

（我慢できない）

まだシャワーを浴びていない。けれどもいますぐにでも末莉と一つになりたかった。一分でも一秒でも早く――。

想いのままに裕真は末莉を強く抱き締めながら、彼女の身体をベッドに押し倒す。ギシツとスプリングが軋んだ音を奏でた。

「ちよっ——何するのよ？」

「ごめん。でも……我慢できないんだ」

「だけど……まだシャワー浴びてない……。汚いわよ」

「汚くなんかない。末莉に汚いところなんかないから」

驚く幼馴染みに語りかけつつ、再び口付けをする。

「やめっ——んっ！ んっく……ふちゅっ……んっんんんん！」

これに対し末莉は最初抵抗する様な素振りを見せたのだけれど、しばらくキスを続けているとだんだんそれは弱くなっていった。それどころか、先程同様自分から舌を絡みつけてきてもくれる。ベッドで抱きあいながら、一度も唇を離すことなく、ひたすら互いの口腔を貪り続けた。

そうして口付けを続けつつ、空いた手で幼馴染みの胸を揉む。制服の上からであっても、柔らかな乳房の感触はとても心地よかった。こねくり回すように何度も胸を愛撫する。

「んふっ……んっんっ……くふうう……」

グングニと指で胸を刺激すると、漏れ出す吐息の中に熱い響きが混ざり始めた。くねくねと末莉は身をよじり始める。そんな彼女の下半身に手を伸ばすと、スカートから除く太股を撫でさすった。

肌が掌に密着する。胸とはまた違った柔らかさに、裕真の興奮は更に高まっていった。本能のままに太股からスカートの中へと手を入れ、ショーツに指で触れる。くちゅうっ……。

「んふううっ！」

自分と同じように末莉も興奮していたらしく、既に下着は濡れていた。指先に滑った感触が伝わってくる。

自分とのキスで幼馴染みがあそこを濡らしているのだと考えると、射精してしまいそうな程に嬉しかった。もっと、もっともっともっと感じてもらいたいという欲求がわき上がってくる。

その想いのままに、ショーツのクロッチ部分を指で何度も撫でた。グチュッグチュッと淫らな音色を奏でながら、繰り返し秘裂を刺激していく。

「あっふ……んひあっ！ あっあっ……あふあああ……」

花卉に下着を押しつけるように愛撫するだけで、すぐに末莉は甘い悲鳴を漏らし始める。下着を濡らす愛液量も増え、指先に牝汁が絡みついてくるのがわかった。

ここで今度は下着を横にずらし、直接秘部に触れる。

ぬちゅうう……。

「んんんん」

開いた秘裂。剥き出しになった花卉の表面はしっとり濡れそぼっている。指先で壁に

触れると、まるでこうされるのを待っていたと言わんばかりに、柔肉の一枚一枚が絡みついてきた。そんな媚肉を丹念に淫猥な水音を奏でながら指先でなぞっていく。

「はふあつ！ あつあつ……くつふ……あふつ……んっふ……あつあつ」

敏感部を刺激するたび末莉の肢体は電流でも流されたかのように、ビクンツビクンツと跳ねた。

が、そうして感じつつも幼馴染みの方も裕真の下腹部へと手を伸ばして来る。制服ズボンのベルトを器用に外すと、中に手を突っ込んできた。

「んちゅっ……はあつはあつはあつ……あ、あんたにばかり好きには……あつあつ……さ、させないんだから！」

こういうところが実に末莉らしい。

躊躇なく勃起したペニスを掴むと共に、シユコシユコと容赦なく扱き上げてきた。肉茎に吸いつくような掌の感触が相変わらず心地いい。数回扱かれるだけで、ペニスはより大きく硬く屹立を始め、肉先からはすぐに先走り汁を分泌させ始めた。

「はあはあはあ……ね、ネチヨネチヨした汁が出てるわよ。男も気持ちいいと濡れるって前に小鳥に聞いたことがあ……んっく……あつあつ……ある……けど……ふーふー。これってか、感じてるってことでいいのよね？」

「あ、う……うん」

「そう……なら……どう？ これは？ 感じる？」



先走り汁を掌で搦め捕り、より激しく肉槍を刺激してくる。

「あああ……凄いい……。そつれ、いいよ。射精ちやう。こんなのすぐに射精ちやいそうだよ。あああ……駄目。そんなにされたらもう……」

正直なことを言えば、ただ愛撫しているだけでも絶頂<sup>1</sup>してしまいそうな程に肉棒は昂ぶっていた。そんな状況での手淫——耐えることなどできはしない。

「そう……。なら……。そろそろいいわよね」

そう言うのと末莉は一度手淫を中断し身を起こすと、躊躇なくこちらのズボンと下着を下ろしてきた。ビヨンツとペニスが飛び出す。剥き出しになった肉棒は自分で言うのもなんだけれど、いまにも破裂しそうな程に膨れ上がっていた。

「凄いい……。こんなに大きくなってるなんて……」

ゴクリツと息を吞みつつ幼馴染みはベッド脇にあったコンドームを手にとると、これをペニスに装着してきた。

「前はその……勢いでしちゃったけど……ちゃんとゴムはしないとね……」

言い訳するようにそう呟きながら、自分のスカートの中に手を入れ、白いショーツを自ら引き下ろすと、末莉はベッドに横になる裕真に跨がってきた。

「え？ ど……どうするつもり？」

「いったい彼女は何をするつもりなのだろうか？」

「前はその……あ、あんたに好き勝手やられたからね。今日はあたしの好きにやらせても

らうから！ あんたは何もしないでよね！」

疑問に対して応えるように末莉はそんな言葉を口にする、肉茎を握って亀頭部をクチュリツと膣口に自ら添えてきた。

「んんっ……」

スカートに隠されていてどういう状態か目で確認することはできない。けれども膣口から溢れ出た愛液がペニスを伝って流れ落ちていくのがわかる。よく見ると太股まで濡れていた。間違いない花弁は蜜でグシヨグシヨになっているのだろう。

「それじゃあ……はあはあ……い、挿入れるわね」

グジュツ！　じゅぶぶ……ぬじゅううっ！

「あっあっあっ——は、挿入って。はああ……挿入って来た。凄い……やつぱりこれ……大きくて……熱い」

肉棒が蜜壺に包まれていく。前にした時と同じく、ペニスが押し潰されてしまいそうなくらいの締めつけを感じた。すぐ射精でしまってもおかしくないくらいに心地いい。

「どう？　あたしの膣中……気持ちいい？」

「うん。いいよ。凄くいい。だけど……末莉は気持ちいい？　痛くない？」

「あたしは大丈夫よ……。痛くなんかないから……。ううん……ちよつと気持ちいいくらいよ」

気持ちいい——自分のペニスで末莉が気持ちいいと言ってくれている。この言葉だけで

胸の中には抑えがたいほどの幸福感が広がっていった。

「じゃあ……動くわね……。あつふ……。んっんっ……。あふああああ」

じゅっず……。ぐじゅっぐじゅっぐじゅっぐじゅっぐじゅっ！

もちろん挿入だけで終わりではない。末莉はああと息を吐きつつ、ゆっくりとではあるけれど自ら腰を振り始めた。

「くっ！ あああ……。いい！ いいよ末莉！ 気持ちいい！」

肉茎がうねる肉襞によつて擦り上げられる。きつけれど柔らかく、トロトロと蕩ける様な感触。ペニスだけでなく全身が柔肉によつて締めつけられているかのような錯覚までしてしまう。

結合部を中心に末莉の身体が一つに蕩けあい、混ざりあつていくような感覚だった。

じゅっぶ！ ぬっぶ……。じゅっぶんっじゅっぶん……。ぶっじゅぶじゅうっ！

「はあっはあっはあっ……。こつれ……。あんっ……。あん……。凄い。お、大きくなってる。あたしの膣中で……。動くたびに裕真の……。おちんちんが大きくなってる。感じてるんだ。あたしの膣中で……。んっく……。はああ……。いい、いいわよ。もつと、もつと感じていいわ。あたしで……。あたしで気持ちよくなつて」

こちらが感じていることは末莉にも伝わっているらしい。幼馴染みはそのことが嬉しいらしく、瞳を細めて柔らかな表情を浮かべると、これまで以上に腰を激しく、淫らにくねらせてきた。









断る理由なんかないので頷く。

「ひ……引くのね……。はあ……。じゃあいいわ。引いて。一応今回は初回ってことで、一回無料で引けるわ」

「わかった」

よし！ いいものを出すぞ！

気合いを入れてガチャを回す。すると虹色に輝くカプセルが飛び出してきた。レアより上という感じだ。本当にSレアが実装されたらしい。ポンッとカプセルが開く。そこには『パイズリ』と書かれていた。

「ば……。パイズリ？ パイズリって何？」

聞いたこともないといった様子で小首を傾げる末莉の胸元を裕真は見つめ、ゴクリッと息を呑んだ。

（凄い。ホントにエッチな指示が出るんだ——よし）

「それじゃあその……。もう一回回していい？」

「え？ い、一回回したじゃないの……」

「うん。だけどその……。無料券だったわけだし。一度課金しても回してみたい。駄目かな？」  
「駄目かなって……。お金の無駄遣いよ。でも……。あんたが回したいってのを止める権利はあたしにはないし……。回したいなら回せば！」

ズイッとスマホが突き出される。



「ありがとう」

これを受け取った裕真は再びガチャを回した。

結果——『フェラチオ』カードが出現する。

「や……やったあああああ！」

ガッツポーズと共に、裕真は歓喜の声を上げた。

\*

場所は学校の男子トイレ——流石に口でするだけにホテルというのは勿体ないというところで、ここを選んだ。裕真は別にホテルでも構わないと行ってきたけれど、末莉的には無駄なお金を使うというのは絶対にNGである。

(でも……流石に学校のトイレってのはまずかったかしら?)

少しの後悔と共に末莉はドキドキと心臓を高鳴らせながら、便器に下半身を剥き出しにして座る裕真の前にしゃがみ込んだ。

当然の様にペニスは勃起している。

相変わらず大きな肉棒だ。肉茎には幾本もの血管が浮かび上がっている。余程興奮しているのか、赤黒い亀頭の先端部からは、既に先走り汁が溢れ出していた。濡れたペニスがかき回すたびに、赤黒い亀頭の先端部からは、既に先走り汁が溢れ出していた。濡れたペニスが時折ヒクッヒクッと蠢く様が、なんだかちよつと怖い。

(これを胸で挟んで……口で啜える? し……信じられない。あり得ないわ!)

パイズリとはどんなものなのか裕真から説明してもらったものの、そんなこと実際にや

つている人間が本当にいるのかと疑問を抱いてしまう。

ゴクツと息を呑んだまま、末莉は硬直してしまった。

「じゃあ……お願い」

しかし、いつまでも止まっているわけにはいかない。

(し……仕方ないわよね。そういうカードが出ちゃったんだから……)

心の中で自分に言い聞かせると、胸元のリボンと制服の前ボタンを外し、プルンツとレースの下着に隠された乳房を露わにした。もちろんこの下着も脱がねばならない。プツンツとホックを外すと、我ながら大きな乳房がたゆんつとまろび出た。

弾ける胸——裕真が視線を向けてくる。もう何度も見えてきたくせに、その表情にはまるで初めて乳房を見たとも言えるかのような感動の色が浮かんでいた。

(うう……恥ずかしい……。やっぱり裕真は変態ね……)

とは思いつつも、自分で喜んでくれているのだと考えるとちよつと嬉し——な、なんてことあるはずないでしょ！　こんなの恥ずかしいだけなんだから。早く……早くやって終わらせないと……。

そう自分自身に言い聞かせると「そ……それじゃ始めるわね」と躊躇いつつも胸の間にペニスを挟んだ。

「んんんんっ」

(これ……熱い……。なんか……おっぱいが火傷しちゃいそう……)

胸の間に肉棒の硬さと熱気が伝わってくる。挟まれたことで刺激を覚えたのか、谷間で肉棒がヒクンッと跳ねた。この感触に、一瞬身体が硬直してしまう。だが、止まっている暇はない。ここは学校のトイレ——放課後ではあるけれど、誰かが来るかもしれないのだ。だから早く終わらせないと……。

「えっと……確か……こうやって擦ればいいのよね？」

上目遣いで裕真に尋ねつつ、上半身を揺らして肉棒を擦り上げた。胸と胸の間でペニスが蠢く。柔らかな肉の中に屹立が沈み込んでいった。

ぬちゃっぬちゃっぬちゃっぬちゃっ……。

溢れ出す先走り汁と胸が擦れあい、卑猥な水音を奏でる。とてもいやらしい音だ。恥ずかしすぎる。

（グチュグチュ鳴ってる。こんな嫌らしい音——あたしが鳴らしてるの？）  
死んでしまいうまくないの羞恥を覚えてしまう。

「ど、どう？ 気持ちいい？ んっんっんっ」

しかし、裕真の前で弱味を見せるわけにはいかない。だから表面上は余裕を持って、挑発するように尋ねた。

「うん……。き、気持ちいい。凄くいいよ」

問いかけに対して幼馴染みは素直に頷く。この言葉が間違はなく本心から出てるものであることは、付き合いが長い末莉にはすぐに理解できた。

自分で裕真が感じている——この状況は恥ずかしいけれど、正直言つてこの事實は嬉しかった。もつと感じさせたい。もつと気持ちよくしてやりたいと、自然に思えてくる。

「そう？ んふふ……それじゃあ……も……も……も……はあはあ……もつと気持ちよくしてあげるわね」

今回はただパイズリをするだけじゃない。フェラチオのチケットもある。

（確かフェラチオって……こ、こういうことよね？）

肉茎部分をぐつちゅぐつちゅと乳房で擦り上げつつ、んあつと末莉は口を開くと、胸の間から覗き見える亀頭をパクツと口で啜えた。

口腔に生温かい肉棒の感触と、嘔せ返るような香りが広がる。舌先に分泌される先走り汁が絡みついてきた。少ししょっぱい。これは汗みたいものだろうか？ それともペニスの表面が汗ばんでいるからなのだろうか？ なんだか凄くイヤらしい味に感じた。

と、味のことばかり話していても先には進めない。重要なのは裕真を絶頂させることだ。（お……おちんちん……確か擦れば気持ちよくなるのよね？ ってことは……こうすればいいのかしら？）

正直言うとフェラチオなどしたことないので、これまでの経験や伝聞で得た知識からやり方を想像する以外にない。必死に思考しつつ——

「んっちゅ……むちゅっ……れろっ……れろっれろっれろお……」

舌を蠢かせて、ペニスの表面を舐める。もちろんただ舐めるだけではなく、恥ずかしい



精そうになつてる？」

肉棒は止まることなく膨張していく。

「んっちゅ……はふう……れ、れほうなの？」

ペニスを啜えたまま問う。

「うん。もう限界かも……」

「しよう……なら……いいわよ。ほりゃ……しゃっしやとらひなはい」

「だけど……それだと末莉の口の中に——」

確かにそれはその通りだ。

いままで何度か射精された精液を見てきたけれど、本当に生臭く濃いものだった。あんなものが口の中になんて考えると、それだけで震えが来てしまう。だけど、裕真のものと考えると、なんだか受け入れられるような気がした。

「しよこまれふくめれ……ふえ……ふえらていおなんれしよ？　らから……え……えんりよなんてしゆるんじやないわよ！」

素直にその想いを伝える。

（これはその……仕事だし……裕真に対する責任もあるからなんだからね！）

心の中で言い訳のような言葉を繰り返しながら……。

「ほりゃ……いちゅれもいいかららひなしゃい。んっちゅ……ちゅぼっちゅぼっちゅぼっちゅぼっちゅぼっちゅぼっ！」

技工など何もなければ、これまで以上に一生懸命肉棒に奉仕する。射精を促すようにひたすら、肉茎と亀頭を刺激し続けた。

ズポツズポツと頭を前後に振るたびに、肉槍は大きさを増していく。

「くあああつ！ も……もう駄目。で……射精る！ 射精るよ！」

やがて裕真は限界を伝えてくる。幼馴染みは愉悅に蕩けたような表情を浮かべながら、末莉の後頭部に手を回し、容赦なく抑え込んできた。

どじゅううっ！

「おぼっ!!」

肉槍が一気に喉奥にまで突き込まれる。一瞬息がつまった。視界が真っ白に染まる。

刹那——

どびゅばっ！ びゅばっ！ どっびゅどっびゅどっびゅ——どびゆるるるう！

「ぶぼっ！ おつぶ——ふぼおおっ!!」

肉茎が脈動し、多量の白濁液を口腔に撃ち放ってきた。震えるペニスから汁というよりもゼリーといった方がいいのではないかと思うくらいに多量の肉汁が溢れ出す。その量は想像以上に多く、一瞬で口腔が満たされてしまう。ブクツと内側から餌をため込んだ小動物の様に頬が膨れ上がってしまうほどのものだった。

（射精てる。あたしの口に裕真のが——こっれ、凄い量。それに熱くて臭くて……まずい。舌が痺れちゃいそうなくらい……。あああ……溺れる。あたし……せーしで溺れちゃいそ

う……)

味覚が麻痺してしまいそうな程の味がする肉汁によって口腔を満たされる息苦しさは掻く。が、裕真は後頭部を押さえる手を離してくれない。この為、結局最後の一滴まで肉汁を口で受け止める結果になってしまった。

「はああああ……よかつたよ末莉……」

しばらくすると射精を終えた裕真がペニスをチュボツと口腔から引き抜く。

「あつぶ……ぶぼつ……おええええ……けほっけほっけほっ」

口が解放された途端反射的に咳き込み、末莉は流し込まれた肉汁を吐き出した。糸を引きながらぼたぼた零れ落ちる多量の白濁液が、唾液や先走り汁でベトベトになった乳房を汚す。ニチャアツと肌に張りつく熱液の感触に、ヒクッヒクツと末莉は肢体を震わせた。

(凄い……こ……こんなに……こんなに射精なんだ……。あたしでこんなに感じてくれたんだ……)

正直言うとうと苦しかったけれど、こんなに射精すほどに裕真が感じてくれたのだと思うとなんだか嬉しかった。

ただし――

「ご、ごめん……。大丈夫!!」

「大丈夫って……はああ……だ、大丈夫じゃないわよ! し……心配するくらいだったら、最初からこんなことしないでよね!」





どっじゅ！　じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっ！

\*

「んひいひい♥　あああ……とっどく……さつきよりも奥まで……奥まで届いてるのお♥  
あっあっあっ——絶頂く！　まった……またあたいぐ！　いぎゅううっ♥」

「くっ！　末莉いっ！」

胸元をほだけた幼馴染みが、巨乳を揺らしながら絶頂に至る。キュウツと絡みつく肉壁の感触に溺れながら、再び裕真は肉汁を撃ち放った。

「あああ……。射精てる！　まった……また射精てるう♥」

「まだだよ！　まだ！　まだいくよ！」

それでもペニスは決して萎えない。それどころか射精をすればするほどより硬く、熱くたぎっていくような気がした。

だから裕真は更に腰を振る。

「うっそ！　あああ……。動いてる！　射精しながら！　射精しながら動いてるう♥　だつめ……まだ……まだあたい絶頂ってるの！　絶頂ってるのにこ……こんな……あっあっあっ——こんなに動かれたっら……また……あっだひまた……またいっぢやう♥　絶頂きながら……絶頂きながらいっひやうのお♥　だから……少し……すっこしでい……いいから……あっあっ……や、やすましてえ」

「無理……。無理だよ末莉。こんな気持ちいいのやめられない。だから……絶頂って……」

絶頂っていいよ！ 僕にもっともつとイヤらしい姿を見せて！

ピストンを中断することなどできなかった。それどころかより腰の動きは大きく、激しいもの変わっていく。

「んっひ！ ひっひっひっひっ——ふひいひいひい♡」

こちらの動きに末莉はひたすら身悶え続けた。

\*

それからいったい何度抜かぬままに射精し続けただろうか？

気がつけば裕真も末莉も服を脱ぎ捨て、全裸となっていた。

身体中から汗が垂れ流れる。ベッドは溢れ出す体液でグチョグチョに濡れていた。ムワツとした発情臭が室内いっぱい広がっている。

そのような状況でベッドを軋ませつつ、裕真は末莉と後背位で繋がりを続けていた。

「はあっはあっはあっはあっはあっはあ」

「んっふ……ふー♡ ふー♡ ふー♡ ふー♡」

言葉も何もなく、荒い息を吐きながら互いに腰を振る。まるで本物の獣にでもなったかのような姿だった。

「で——射精るっ!!」

そして射精する。ドクドクツと肉棒を震わせながら、多量の肉汁を撃ち放った。

「んっひ！ 絶頂くっ！ あああ……いぐっ——いぎゅう♡」

射精にあわせて末莉も達する。ブシューウツとまるで失禁でもしているかのように、結合部から愛液を飛び散らせながら……。

「はあはあはあ……」

全身が絶頂後の気怠さに包まれていく。

ぐったりと力を抜く末莉。そんな彼女にできるだけ体重がかからないように気にかけてながら、背後から末莉を振り向かせ、唇を重ねた。

チュツチュツチュツと口付けする。貪るように口腔の味を堪能した。

しばらくして唇を離す。ツプツと伸びる唾液の糸に、またも興奮を誘われ、ペニス再び硬く屹立していった。

「はふううう……ま、また……大きくなってきた。あたしの膣中で……」

「いい？ またしてもいい？ 我慢できない」

もっとしたい。もっと末莉を抱きたい。グチャグチャにしたい。

「ち……ちよつと待って……」

しかし、こちらが腰を動かす前に、末莉が動きだした。ズポツと挿入していたペニスが引き抜かれる。

装着したままのゴムは、まるで水風船みたいに膨らんでいた。

「こんな……射精したんだ……」

うっとりとしながらゴムを外してくると、末莉は裕真の身体をベッドに仰向けにし、自

分からのし掛かってくる。

「ま……末莉？」

いったい何を考えているのだろうか？

「その……き……今日だけ特別なんだからね」

疑問を抱いていると、それに答える様に末莉は屹立したペニスを手で握ると、膣口にそつと肉先を添え、自ら腰を下ろしてきた。

ずつぶ……。ぐじゅつ……。じゅぶうううつ。

「んっく！ あっあっあんんんん♥」

肉槍が蜜壺に沈み込んでいく。すぐさま襞の一枚一枚が肉棒に絡みついてきた。ゴム越しに感じていた時以上の肉悦がペニス全体を包み込む。まるで全身が末莉に抱き締められているかのような性感を覚えた。

「あああ……。凄い！ 気持ちいいよ末莉」

「あたしも……。んっんっんっ……。あたしもいい♥ 気持ちいい♥ 感じる。裕真をあたしの膣中に感じるの……。ああああ♥ 裕真……。裕真！ 裕真裕真裕真ああ♥」

挿入だけでは終わらない。

末莉はこちらの名を何度も呼ぶと、上半身を倒し、口付けしてきた。そのまま積極的に舌を挿し込んでくる。淫らに口腔を貪りながら、自ら腰を蠢かせてきた。

「んっふ……。あふううつ！ むっじゅ……。むっむっむふうううう」

ただ舌を動かすだけでなく、頬を窄めて吸引し、時には唾液まで流し込んでくる。どこまでも積極的な動きだった。

末莉がそこまでして自分を求めてくる——それが堪らなく嬉しく、より興奮が煽り立てられた。射精衝動がより大きく強くなっていく。

「末莉……射精する！ こつれ……射精するよ。射精ちやう」

「い……いいわよ……。あつふ……くふうう！ だ……射精して。射精していいわ♥ あたしの……あたしの膣中に射精して♥」

「でも……」

「構わないから……あつあつあつ——裕真だったら……裕真だったらいいから♥ ううん。違う。欲しい……んつく……あふあああ……。はあはあ……欲しいの。裕真のせ……せーしを膣中に欲しい♥ 好きだから……。裕真のこと大好きだから……。あ……んんん……あつい、してるから……。だからちようだい。あたしの膣中に裕真のせーし——たくさん射精して♥」

真っ直ぐ見つめながら射精を求めてくる。

初めて裕真に好きだという言葉を向けながら……。

「末莉！ 僕も！ 僕も好きだ！ 末莉のことが大好きだあつ!!」

これほどの想いを向けられて我慢なんかできない。できるはずがない！  
気持ち膨れ上がる。

蠢く末莉の腰に合わせて、裕真も激しく肉槍を膣奥に打ちつけた。

どじゅっばどじゅっばどじゅっばどじゅっばどじゅっばっ！

「すっごい！ あああ！ 絶頂つく♥ こつれ…：絶頂くの♥ あっあっあっ——絶頂っ

ちやう♥ 絶頂っちやうのおお♥」

「僕も絶頂く——絶頂くよ末莉！」

「射精して裕真！ あたしの——あたしの膣中にたくさん射精してええ♥」

刹那、マグマのように噴き上がってきた絶頂感が爆発した。

膨れ上がった亀頭がビクンッビクンッと震え——

どっびゅ！ どびゅば！ どっびゅどっびゅどっびゅどっびゅどっびゅ——どっびゅるるる！

「んっひ！ ふひいひい♥ きつた——熱いのが…：あじゆいのがわだひの膣中に来た

ああ♥ しゅごい！ あそこが…：おま○こがいつぱいになる♥ 射精てる。たくさん

…：たっくしやん射精てるのお♥」

多量の肉汁を蜜壺に流し込む。ドクンッドクンッという肉茎の痙攣に合わせて、末莉は身悶えた。そして——。

「ああ…：。気持ちいい。こつれ…：よすぎる！ あっあっあっ…：いい♥ いいの♥

んっひ——くひいひい！ 絶頂つく！ 絶頂くうっ♥♥♥」

幼馴染みも絶頂に至る。

肢体を痙攣させながら肉壁を収縮させ、精液を最後の一滴まで搾り取ろうとするように

締め上げてきた。

「あつふ……はふああああ……」

やがて繋がりがあつたまま身体中から力を抜き、ぐったりとしながら上半身を裕真へと預けてきた。

「はあはあ……裕真。好き……大好き♥」

「僕も……僕も大好きだよ」

肩で息をしながら、想いを伝えあい——再び口付けした。

そして——それから何度となく裕真は末莉と交わり続けた。

夜が明け、窓枠から朝日が差し込むまで……。

「あつは……はふああああ♥」

ぱっくりと膣口を開けた末莉が身体中を白濁液や汗でドロドロにしながら微笑んでくる。まるで輪姦でもされたのではないかと思える程に、肉汁に塗れた姿だった。

けれど、そんな姿が何よりも、どんなものよりも裕真には美しいものに見えた。

\*

「で、そのさ……いままであたしがもらって来たお金……あなたに返そうと思うんだけど」  
ひたすらエッチしまくった後の帰り道、唐突に末莉がそんなことを提案してきた。

「か……返すって……なんで？」





この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作・転載・無断複製は厳禁です。著作権者及び関係者の許諾を得ずして複製・転載・無断複製を禁じます。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!